Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

003

江戸時代の子ども

——『夢酔独言』を中心に——

木本尚美
（広島女子大学）

目　的

長期平和を推持し続けたといわれる江戸時代が、構築した文化や生活様式は、現代にも何らかの影響を残し、示唆を与えていると考えられる。

わが国における子どもの生活環境の変遷を解明する一環として、近世社会における江戸の下級武士が記した自叙伝より、子の日常の一斑を推察する。

方　法

資料として下記を用いた。

勝小吉著　勝部真長編　1969『夢酔独言』　平凡社

青年期に至るまでの回想を中心に考察する。

結果と考察

『夢酔独言』は、勝海舟の父、勝左衛門太郎（1802～1850）が、42歳（1843）の時に書きつづった自叙伝である。筆者は旗本御家人とはいえ、小普請組といわれた下級、微禄の無役に等しい旗本で、役入りの運動を多少はしたものの、成功しないままに生涯を終えている。もっぱら無頼の徒と交わり、自由気ままな人生を送った筆者は、晩年になって"たとへばおれを見ろよ。理外にはしりて、人外のことばかりしたから、祖先より代々勤めつゞゐた家だが、おれがひとり勤めなゐから、家にきづを付た。是かなにより手本だは。今となり、醒めていくらも後悔をしたからとて、しかたがなゐ"と述懐し、立身出世ができなかった事実を悔やんでいる。しかし自らの境遇は、我が子が孝行してくれる様を、"益友をともとして、悪友につき合ず、武芸に遊んでいて、おれには孝心にしてくれて、よく兄弟をも憐、けんそにして物を遣ず、衣服をも恥じず、粗食し、おれがこまらぬよふにしてくれ、娘が家内中のせ話をしてくれて、なにもおれ夫婦が少しも苦労のなゐよふにするから、今は誠の楽いん居になった。"と述べ、満足している。さらに、"おれのよふの子供ができたらば、なかなか此楽は出来まいとおもふ。"と自らを、見習うべきでない子の見本と自覚している。

筆者は自己反省をしたうえで、子孫へのしつけ教育の基準を次のように規定している。

男子8・9歳　学問を始め、武術に励む。
諸々の著述本を見るべし。

女子10歳　髪月代を仕習う。
縫はりを行なう。

13歳～　手習いなどもして、人並に書くことをすべし。
外へ嫁しても、事をかゝず一家を納むべし。

これらの規定は、筆者42歳にして教訓したことであって、"いたづらのしたいだけして、日をおくった。"という幼少の頃の現実とはなはだ異っている。実際筆者は喧嘩ばかりしていたようである。

〔五歳・凧喧嘩〕

"おれが五つの年、前町の仕ごと師の子の長吉といふやつと凧喧嘩をしたが、向ふは年もおれより三つばかりおふきいゆへ、おれが凧をとつて破り、糸も取りおつた故、むなぐらをとつて、切り石で長吉のつらをぶつた故、くちべろをぶちこはして、血が大そう流れてなきおつた。そのときおれの親父が、庭の垣ねから見ておって、侍を迎によこしたから、内へかへったら、親父がおこって、「人の子に疵をつけてすむか、すまぬか。おのれのよふなやつはすておかれず」とて、縁のはしらにおれをくゝして、庭下駄であたまをぶちやられた。"後年たびたび回想される事件の一つのようである。よほど印象的なできごとだったのであろう。子ども同士のすさまじい争いをじっと見ている父親、喧嘩の後の対処のしオも並ではない。

〔七歳・凧喧嘩〕

"この年に凧にて前丁と大喧嘩をして、先は二、三十人ばかり。おれはひとりでたゝき合、打合せしが、ついにかなはず、干かはの石の上におねゐとゆけられて、長棹でたゝかたっかれて、ちらしかみになったが、なきながら脇差を抜て、きりちらし、所せんかなはなくおもつたから、腹をきらんとおもひ、はだをぬいで石の上にすわったら、其脇にいた白子やといふ米やがとめて、内へおくってくれた。夫よりしては近所の子供が、みんなおれが手下になったよ。おれが七つの時だ。"当時、男子の遊びの中で、凧が人気の上位であったことは前回発表した通りであるが、それだけに仲間同士で常に競争となり、ついには喧嘩になることも多かったのであろう。町人の子も武士の子も入り交っての乱闘さわぎや、多勢に無勢で惨たんたる結果にも、

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

何か明るいものが感じられる。

〔八歳・犬喧嘩〕

"……或時亀沢町の犬が、おれのかっておおた犬と食い合って、大けんくわになった。……おれの門のまへで、町の野郎たちとたゝき合をした。"

1回目：亀沢町は、緑町の子どもを頼んで4，5人の竹やり集団。こちらは六尺棒・木刀・しなねでかかり町のこどもを追い帰す。

2回目：向うには大人が加わってのたたき合い。なまくら脇差を抜いて切って出たら、勢いにおそれ、大勢かたげて行った。

"…前町の仕立やのかきに弁次といふやつが引返し来て、弟のむねを竹やりにてつきおった。その時おれかかけ付て、弁次のみけんを切ったが、弁次めかしりもちをつき、どぶのなかへおちおった故、つゞけうちにつらを切ってやった。前町より子供のおやぢかでゝくるやら、大さわぎさ。……おやぢが張屋の窓より見ていて、おこって、おれは三十日斗り目通止られ、おしこめにあった。弟は蔵の中へ五、六日おしこめられた。"子どものみならず大人も加わり、町中に拡がっている。ここでも乱暴者の息子に対する父親の態度になみなみならぬものがうかがえる。

〔九歳・柔術の稽古，弟子との喧嘩〕

"始は遠慮をしたが、段々いたづらをしゐだし、相弟子ににくまれ、不断互らきめにあった。"とある。

筆者の不行跡はますますエスカレートしたようで、ある時は町内の子どもやその親にまちぶせされて、"それ男谷のいたづら子がきた。ぶちころせ"と、逆襲にあっている。"…直に刀を抜てふりはらいふりはらい、馬場の土手へかけ上り、御竹蔵の二間ばかりのぬま堀へはねり漸々にけ込しが、其時非職はかまなどがどろだらけになりあった。"こうしたまちぶせは何度も経験することで、そのつど徹底して争っている。

筆者は稽古場でも問題児であり、さわぎを起こす張本人のことが多かったのであろう。いはれの場面も陰湿さはなく、すさまじいものの単純であったと思われる。

〔十歳・馬の稽古を始める〕

筆者は馬が好きで、稽古を始めて2ヶ月目に遠乗に出たら、師匠から"またくらもすわらぬくせに。以来はかたく遠乗はよせ"と言われ、がまんすることなく即師匠を変えている。新しい師匠については、"この師匠はいゝ先生で、毎日木馬に乗れとて、よくいろいろおしへて呉たよ。"と気に入って稽古に励んでいる。

〔十一歳・剣術の稽古〕

剣術の稽古場でいやがらせをする頭の息子に対しては、"…いろいろ馬鹿にしおゐる故、或とき木刀にておもふさまたゝきちらし、あくたいをついて、なかしてやった。師匠にひどくしかられた。"とある。泰平の世の中で無役の武士の子には、がまんの限界があり、稽古にことよせて日頃の報復としたのであろう。"女を見たような馬鹿野郎だ。"とまで罵倒しており、反省の様子はない。

〔十二歳・学問〕

兄の世話で始めたものの、"…学問はきらい故、毎日毎日さくらの馬場へ垣根をくゞりていつて、馬ばかり乗っていた。「大学」五、六枚も覚えしや。"じっと書物を読むのはにがてのようで、師匠の方から断わってきたのを幸いに、やめることができて安堵している。馬や剣術に比べ、自分の素質に合わないと判断したのであろうか。

〔十四歳・出奔，十六歳・出勤，二十一歳・再出奔〕

手のつけられぬ腕白少年は、ついに14歳で出奔、4ヶ月間乞食旅をしている。"十四の年、おれかおもふには、男は何をしても一生くわれるから、上方当りへかけおちをして、一生いはふとおもって、…"

小田原から4ヶ月ぶりに帰宅したものの、放蕩の不養生がもとで、その後2年は、"…そとへもゆかず、内すまいをしたよ。"とある。その後16歳にして出勤・逐対した筆者は、逐対の書面に自分の名前さへ書けず、"人に頼んで書て貰た。"とあるから読み書きの術は全く身についていない。この時点でまだ学問に目覚める様子はなく、"おれがおもふには、是からは日本国をあるいて、なんそあったら功死をしようと覚悟して出たからは、なにもこわいことはなかった。"と再び21歳で放浪を始めている。そして"みんなおれがわりいから起きたことだ、と気がつゐたから、おりの中で手習を始めた。"と心境の変化をきたし、読み書きに一念発憤するのは数年後、逼塞中の身からであった。

以上みてきたように『夢酔独言』は、終始話しことば的文章で記してあり、青年期までの回想の多くが、"喧嘩"ばかりなのには驚かされる。筆者が生まれ、育った江戸、本所・深川あたりは、旗本・御家人屋敷と町屋とが入り組む環境にあったようで、武士と町人が互ほ同等の庶民生活を送ったものと推察できる。腕白で喧嘩好きながら、愛すべき子の姿が彷彿として来よう。

NII-Electronic Library Service